



猫の盲点



rigel.

猫の盲点

rigel.

「嗚呼、また同じだったのか」

猫はそう言って歩き出した。

打ちひしがれた猫は靴ひもを結び、駅から降りて見上げた空は、限りなく蒼い空だった。

猫は切符とマタタビを持ち、改札を出た。

たくさんの日々の中で、当たり前のように朝は来る。

生きているという事は、そういうことだと猫は思った。正しいかはまだ分からない。

猫のアロンは、全世界、全国各地を列車で旅をした。たくさんの景色を見て、たくさんの人に出会った。

あるものを探し求めたのだが、結局この世界には無かった。彼にはそう思えて、今日の朝はとても寂しく、途方に暮れる朝だった。

時は2145年。アロンが生まれてから、たくさんのものが形を変えていた。

ヒトは自由に空を飛べるようになったし、ヒトだけではなく、たくさんのものが話せるようになり、なぜか戦争も無くなった。この世界は幸せになったようだった。

「さあ、ここからどうしようかニャ」アロンは言った。

もう行く当ても無い。

これからの事なんて、考えもできなかった。

一つに繋がったこの世界は回り切ったし、あとは、昔「キョウト」と呼ばれていた、この地を回るだけだった。この地もほとんど回ったし、世界をもう一度回る気持ちと理由が無くなったのだ。

駅からの一本道を歩くと、たくさんのものに出会った。

殆どのものが機械化されて、今はロボットとヒトが世界を覆っている。

今はロボットとヒトの「世界統合協議会」の審議で、ロボットが優勢に進んでいる。

その協議会を優位に進めた方が実権を持ち、今この世界に溢れている”セイメイタイ（生命体）’

'の管理及び権利を掌握できる。そうすれば、大体の事ができるようになるのが今の"ヨノナカ"だった。

そんなことは、アロンには興味の無い話だった。

駅前はとても栄えているが、古くから繁栄していたこの地も、今は整備が進んでおらず、少し道を外れると木々が生い茂るような風景だった。

ヒトが整備する事、その行動とココロを忘れ、ロボットと生きる事を決めたことで、歴史的な建物は葉に覆われていた。そこでは、昔大事にしていた事も、何かに覆われていた。

アロンは、ロボットがとても嫌いで、ヒトに合わせるのも嫌いだった。

よく道を外れ、何かあることを楽しんだ。

変わっていると思われるかもしれない。でもそれが楽しかったのだ。

アロンは殆ど見えない目の代わりにマタタビで道を確認し、少し歩くと、南北に伸びた川に出会った。

そこにはゆっくりとした時間が流れていて、いつか来た事のある風景のようだった。

「こんなところに用はないニャ」アロンはもう川のせせらぎや緑さえ、聞く耳をもたないでいた。

遠く向こうの空には、少し重たい雲もかかっていた。

振り返り、戻ろうとするときにふと視線を落とすと、川のふもとに何かを感じた。

軋んだ音がした。

空き缶か何かの音だと思ったとき、また少し音を見せた。

「・・・のことは、・・・アンド・・・スクエ・・・アに・・・」

古ぼけたナレーションのような音声が、かすかに聞こえる。

アロンは生い茂った河原を少し降りてみた。

ジャ、ジャ、、

草花はアロンの行く手を阻んだ。

しかし、なぜか自分の足は止まらなかった。

近くまで来てみると、-アロンには見えていないが-そこには見た事もない姿があった。

基本的には手足のある形だが、手は片方取れている。

銀色で、50センチ程度の大きさだっただろうか。

体の真ん中にあるスピーカーからは、小さな音が鳴っている。

アロンには、小さなものが動いているのを感じた。

この世界にはヒトやロボットの他にも色んなものが命を与えられている。

不思議に思っていると、顔のような部分がキリキリと音を立てて動いた。

アロンは驚き、持っているマタタビを構えた。

「オドロカ ナイデヨ」

またアロンはビクツとした。

あまりにも古い日本語が聞こえてきたからである。

「ハナシ ヲ シヨウ ヨ」

「何なのニャ？」

また古ぼけたナレーションが聞こえてきた。「”一般”ニホンゴ に変更します」

「僕の名前はアルケと言います」

「2014年製です」

相当古い”セイメイタイ”だった。

ところどころのサビと樹脂部分のへこみが、それを大きく物語っていた。

「なぜこんなところにいるニャ？今の大体の”セイメイタイ”のバッテリーは長くて50年。もうスクラップもいいところニャ」

アロンは恐れながらも、相当馬鹿なセイメイタイだと感じ、少し安堵もしていた。

「スクラップされて、また新しくセイメイタイやロボットになることが、誇りだニャ？」

「そうなので、私は旅をしていて、どこでもスクラップを受け付けてくれなかったのです」

「なるほどニャ。なぜ旅を？名前があるのも可笑的ニャ」

「ご主人様を探しにです。アルケはご主人様からの名前です」

「ですが、名前なんてただの記号に過ぎないです」

「確かに。名前にこだわる必要はないニャ。主人は見つかったのかニャ？」

「いいえ。わかりませんでした。こころあたりを探したのですが。」アルケは寂しそうに言った

。

「あなたは、なにをしているのですか??」アルケが問いかけた。

「僕も旅をしていたニャ。今思えばだが、とっても楽しい旅だったニャ。でも僕も探していたも

のは見つからなかったニャ」

「そうですか。それは残念です。でも、他にどこか見つかりましたか??」

「そうだニャ。見つかったけども、どれも儂いものだったニャ」

「ヒトや楽しい事は、きっと儂いものです。大切なものは、きっと目には見えません。また、本当に大事にしないと大切なものは育たないのでしょうか」

「・・・たしかに。ヒトは今、浅く生きすぎているニャ。時が早いなんて、嘘だニャ。」

「ええ。時は自分で創るものです。」アルケは切なそうに言った。

「アルケは、どんな旅だったニャ？」少し興味を持ち、今度はアロンも話し始めた。

「はい。とても寂しい旅でした。こんな外見ですの、ほとんど相手にしてもらえず、たくさんの罵倒を受けました。今のロボットたちはとてもスマートで、何かに取り憑かれているように賢く動きます。私のようにではありません。しかし、」

アルケは空を見上げて言った。

「探していたものも見つかりませんでした。素晴らしいものに出会いました。寂しく、でも素晴らしい旅だったので。」

アロンはドキッとした。

自分にはない言葉の重みを、たかがセイメイタイが話していた。

罵倒を受けた寂しい旅に、素晴らしさを感じる事は、アロンにはできない。

「何があったニャ？」

「ひとつ、出会いがありました。同じ場所で生まれた、ロボットと出会ったのです。彼とは、一日一緒にいる事ができました。そして色々な場所を歩き、話して、互いの命をシェアしました。彼もとても素晴らしい経験をしていましたが、話せる相手がいませんでした。私と同じく、外見のせいです。ヒトは、見た目や表面で判断します。愛を忘れ、本気でつきあおうとしません。それは、本気でつきあうことを恐れているとも言えます。勇気というものがないのかもしれませんが。それが浅さを生み、ナカマというものになれずにいます。ですが、私達は命をシェアし、本当の仲間になったのです。」

アルケは遠い目をしていました。

「ですが、そんな時間は続きませんでした。彼も古い型式で、電池はほとんどありませんでした。私との旅とシェアで電池を使いすぎたのです。セーフモードを勧めましたが、彼は聞きませんでした。」

「「ここでセーブをするより、ワタシはあなたと話したい。」彼はそう話したのです。私は彼の本望を聞き入れ、時間が過ぎる限り、他愛のない話をしました。そのうち、彼は電池が切れたのです。私は、彼の為、スクラップへの受付をしました。」

「彼にとって、大事なものは、楽しく浅く、長く生きることではなかったのです。懸命に生き、愛を持って「その時」に自分を懸けることだったので。」

「そして、私はその気持ちを受け、今を生きているのです。」

「だから、何にも寂しくありません。大切なものに出会いました。」

「そして、こうしてあなたに会えて、本当に良かったです。」

「愛とは、どう表現したらいいのか、私にはわかりませんが。本当にこの時間ができて良かったです。」

アロンには聞く事しかできなかった。

アロンの旅は楽しいものだった。猫の姿もあり、さらにマタタビで道を歩く姿に、周りは優しくかった。

色んなものを見て、色んな事を感じたはずだった。

しかし、今アルケと話してみて、“何か”を見れていなかったのかもしれない。

ただ単に、アロンは「自己満足」をしていただけかもしれない。

本当に自分は、「今」を「生きて」いたのだろうか。

「ねえ、アルケ」アロンも話始めた。

「僕は君を誤解していたニャ。私は目がほとんど見えないし、君がどんな姿かも殆ど分からない。ロボットすらも嫌いで、セイメイタイとも話したくはなかった。すなわち、何者か分からない君とは話したくなかったんだ。でも、表面ではない君の話を聞いて、今僕も何かを感じられたし、同時に、今までの自分の旅を後悔すらもしてきたニャ」

アロンがここまで正直に話した事も、今までなかった。

「ありがとうございます」アルケも素直に感謝した。

「ですが、気づかないのも幸せなことだと私は思います。大事なのは、「自分がどれくらいの深さで生きるか」ということです。その知らない間にしている「選択」に後悔をしないことが大事だと思います。だから、自分と向き合う時間は大事だと思います」

アルケからの言葉は圧巻だった。

二人を包む川のほとりは、少しずつ暗くなっていった。

「もっと色々話したいニャ！」アロンは自分が言い出した、変わったような発言に、ココロの隅で自分もびっくりしていた。

「私もです」アルケも応じていた。

暗い雲が雨を呼び、もはやヒトすらも耐える事ができない酸性雨が、アロンの手にも降ってきていた。

そして、アルケの体に触れたとき、ほんの僅かな音と共に、酸に溶けるアルミの匂いがしていた。

「！！」そこで初めてアロンは気づいた。
「アルケ！ロボットだったのニャ？！」

「はい。そうです。」アルケはそっと答えた。
アロンには考えられなかった。

こんなに真剣に、大切に話していた相手は、自分が嫌いだったロボットだったなんて。気づけず、過去の記憶に囚われて思い出した嫌悪感を持ちながらも、その一瞬のアロンの体と言葉は、全く違う事を表していた。

「アルケ、早く陰に！！君が溶けてしまうニャ！」

「いいのです」

「私はとても大事な出会いを果たしました。」
「ここでセーブをするより、ワタシはあなたと話したい。」
アルケの言葉に、彼の覚悟がのっていた。

アロンは何も言えず、ただ目には溢れんばかりのナミダが見えていた。
見る見るうちに、アルケの体はサビと赤褐色の反応で覆われて行く。
「あなたが、私と話して、また、なにかを、受けてくれると」

「私に、、生きた価値が、、生まれます」

「ただ、、それだけで、嬉しいです。」
「あなたの中で、、、、生きます、。」

「デハマタ」

「本ロボットは使用推奨期限を終了致しました。スクラップまたはリサイクルを選び、これからの世界に貢献させてください。本ロボットは使用推奨期限を・・・」
とても寂しく繰り返されるナレーションが、あたりを包んだ。

アロンは何も感じる事ができなかった。
悲しいのか、辛いのか。何も分からない感情がそこにはあった。

アロンが生きてきて、全世界を旅しても、感じる事ができなかった、凜としていながらも憐く、とても大事な感情だった。

何の言葉にも代えられなく、それはまるで、ナミダが溢れ出す1秒前に感じる、憐くも暖かい感情のようだった。

そして、それはアルケに対する感情だけではなかった。

アロンはアルケの体を持ち上げながら、少し、笑みを浮かべた。

「ありがとうニャ。」

「今、感じた感情は、君がいなければ感じられなかった。僕がずーっと探していたものが、こんなところに落ちていたなんて。この暖かい感情は、ずっと忘れないニャ。ヒトであれ、ロボットであれ、この感情を持つのは誰でもできるんだニャ。形は関係ない。単に生きるから持てるものじゃない。経験の中で、本当に素晴らしい優しさに出会うことができたなら、気づけるんだニャ。」

「それに気づく事ができた今日の日で、僕の旅は終わりだニャ。」

「アルケ、ありがとう。愛している。」

「嗚呼、また歩きだすのだな」

猫はそう言って歩き出した。

愛を知った猫は、アルケを腕に抱え、愛する友人をスクラップさせる。

彼を世の中に還す為に。

そしてその後、また旅をする為に立ち上がった。

そう、ここからは、感じた愛を世界中に伝える為に。

そう誓ったアロンが見上げた空は、限りなく蒼い空だった。